

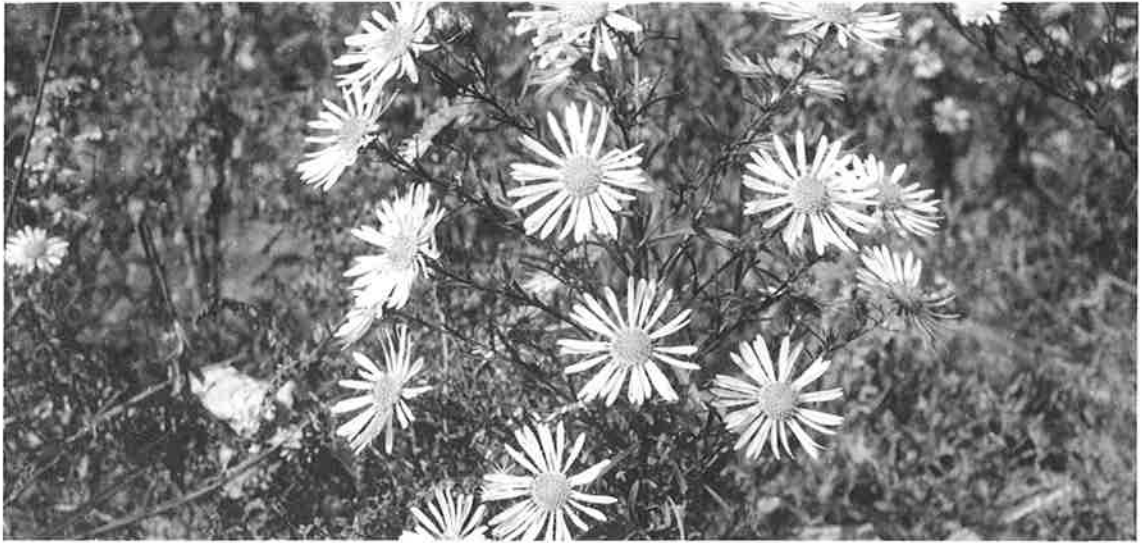
財団だより

# 多摩川

1994.12 第64号



ギバチ (ギギ科)  
毒性のあるトゲを持ち、中流部に生息する。



府中市四谷地先のカワラノギクの群落。  
第二関戸橋の架橋工事でその存続が危ぶまれている。(平成6年11月13日撮)

## ■多摩川現風景■

### (20) カワラノギクの保護

カワラノギクの群落が多摩川の川原から姿を消しつつある。

カワラノギク(キク科)は別名ヤマジノギクとも呼ばれ、関東や東海地方の砂利の多い荒れた川原に生育する。日本では多摩川がその分布の北限とされてきたが、川の地形や地質、水質の富栄養化などで、徐々に群落が衰退してきている。頭に「カワラ」とつく植物は、カワラハハコ、カワラナデシコ、カワラニガナなどいくつかあるが、川の洪水や栄養分の少ない土壤に適応した固有の遺伝子を形成してきた種である。

カワラノギクは、10月末から11月にかけて花を咲かすのだが、白地にはほんの少し紫がかかった花弁が多く、植物愛好家に親しまれてきた。そうした人たちが、いまその種子を採取してあちこちの川原に殖やそうとしている。本来なら洪水によって運ばれるものだが、生育環境の変化で他の植物に負けたり、適地が少ないこともあって止むを得ず

人の手で生育を助けようとしているのである。川原本来の植物が減少していく中、注目されている。

### ●関連する財団の助成研究 (Noは報告書番号)

#### <学術研究>

- ①多摩川河川敷および沿川のタンポポ類の分布と環境の解析 1982年 本谷 勲 東京農工大学 (No.54)
- ②多摩川河川敷の植生の多様性についての研究  
〔植生調査及び既存資料による多様性の把握〕  
1981年 佐伯敏郎 東京大学 (No.40)
- ③多摩川中流の河辺植生における多様性の成立機構についての研究〔一斉試験及び継続観察による解析〕  
1984年 佐伯敏郎 東京大学 (No.69)
- ④増水による河辺植生及び立地変化と復元に関する研究 1984年 曾根伸典 自然環境化学研究所 (No.75)
- ⑤多摩川河川敷の固有植物群落構成種の生活史と存続に関する研究 1994年 井上 健 信州大学  
(今年度発行予定)

#### <一般研究>

- ①カードとパソコンによる多摩川原の植物の同定  
1989年 大川ち津る 都立小山台高校 (No.60)

## 多摩川散歩

### ■二ヶ領用水環境マップ

井田 安弘（二ヶ領用水の再生を考える市民の会）

稲毛川崎二ヶ領用水は今から約400年前、江戸時代初期に開削された多摩川では最も古い最大の農業用水です。徳川家康の命を受けた小泉次大夫は、多摩川の両岸を相互に開削していくやり方で、東京側に六郷用水、川崎側に二ヶ領用水を15年の年月をかけて完成させました。その大農業用水も、明治以降の都市化の流れで六郷用水はわずかな水路跡を残して消滅しましたが、二ヶ領用水は工業用水として利用され、現在18km残っています。

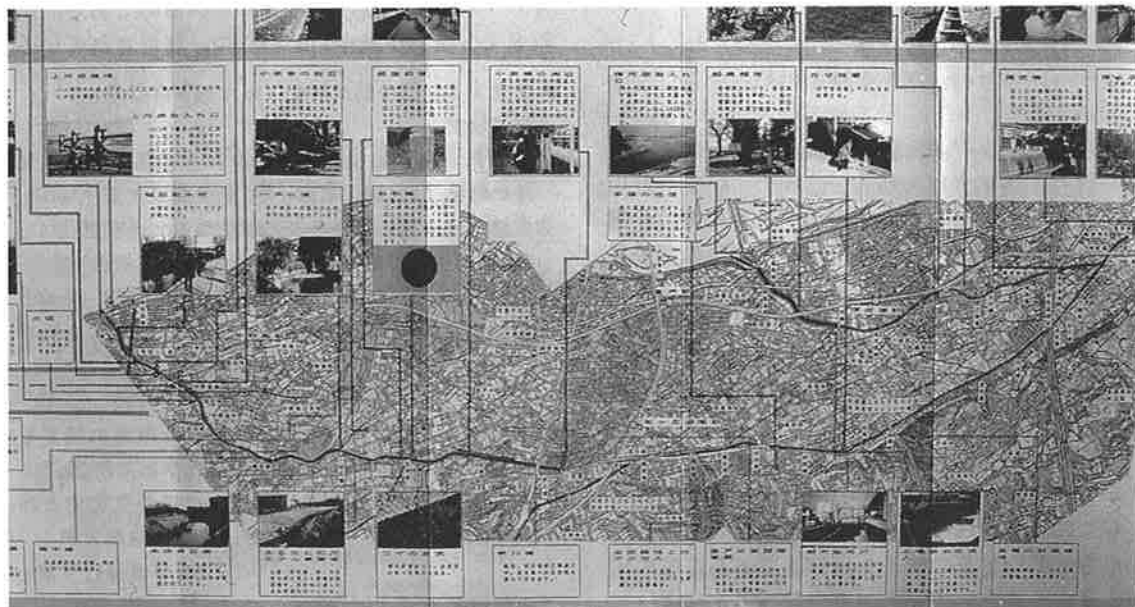
しかし、農地の激減や生活污水の流入による水質悪化、そして工業用水取水停止などにより9年前二ヶ領用水の多摩川からの取水（水利権）が大幅に削減されようとなりました。川崎が多摩川に沿って細長い特異な市域になったのは、それが二ヶ領用水の流域と重なるからです。この川崎のルーツでもある二ヶ領用水を守り、川崎の街づくりに生かそうと結成されたのが「二ヶ領用水の再

生を考える市民の会」です。

結成以来、「市民参加による二ヶ領用水再生マスタープランの作成」「トリ・ムシ・サカナの住める水量・水質・環境を」と沿川各地で活動してきましたが、それが実り平成3年「二ヶ領用水基礎調査」、平成4年「二ヶ領用水総合基本計画」が策定されました。

その二ヶ領用水総合基本計画の中味を充実させ、市民にPRすることを目的に平成6年2～3月に開催されたのが「二ヶ領用水環境マップ」作成のためのワークショップです。この企画には、市民と市職員が対等の立場で35名も参加し、二ヶ領用水の「見どころ・いどころ・歩きどころ」と「生かしどころにただしどころ」の視点から二ヶ領用水沿川を歩いて熱心な作業を行いました。出来上がったマップには二ヶ領用水の現状や魅力などをカラーで示してありますが、このマップは残念なことに印刷数が少なく一般には配布されていません。しかし、6年度中に一般向けの二ヶ領用水環境マップを川崎市の方で作成することになっていますので、それを楽しみに待って下さい。

「二ヶ領用水環境マップ」（部分）



製作 ニヶ領用水ワークショップ参加者  
編集デザイン 小野 邦雄

平成6年7月発行  
問い合わせ先 川崎市土木局河川部治水課

## 私と多摩川



矢川で子供達と水車作り('94、6撮)

### 矢川だいすきクラブ 吉野美子

我が輩は矢川のホトケドジョウである。先祖代々この川に住んでいる。……そう、あれは一年と少し前の或る日の事、女のヒトが二人ひょっこりやって来てこう言った。「ステキな川だから矢川をだしにして遊ばせてね」。全く“だし”だなんて味噌汁じゃあるまいし、変なヒトたちである。でもまあ味噌汁の話ではなさそうだし、ステキな川なんて言われれば悪い気はしないから我が輩はふんふんと聞いていた。

それからというもの、そのヒトたちは『矢川だいすきクラブ』などといって遊び始めた。どこからか古自転車の車輪と板きれを持ってきて、“水車モドキ”を作って回したり、川の中をじゃぶじゃぶ歩いて“矢川をまるごと一本きれいにしちゃえ!”を合言葉にゴミ拾いをしたり。なんでも、長さがたった1.5km、川幅2m、深さもせいぜい子供のヒザ位ときてるからまるごとできるのだそう。そのうえ水は湧水なのである。

竹を担いで来て水鉄砲を作り、段ボール箱製の“やがわ城”で城攻め合戦!なんていうのもやっていた。仕舞には水爆弾まで飛び交って大人も子供もビショビショの大騒ぎだったな、あの時は。

今月は来ないのか?という時は大抵どこかの屋

根の下で、マップ作りとか忘年会とか称してお茶飲み会(?)をやっている。本当にお気楽なヒトたちである。と思ったら、実は誰も来ない事もあったりしてそれなりにオロオロしてるらしい。継続は力、などと慰め合っているという話だ。

そういえばいつだったか二人が話しているのを聞いた。いわく「身近な所にこんなステキな川がある、って注目して欲しい」「コンクリート張りの所も含めて、今のありのままの矢川をみんなが好きになりたいんだ」。さらに「たくさん好きになると、もっと好きになるにはどんな風にしたらいいか考えられるようになるんじゃないかな」。成程。結構気の長い事を言っている。

矢川のファン倶楽部というところか?と思っていたら、プロマイドのノリで印刷から何から手作りの絵はがきは作るわ、カレンダーは作るわ。活動資金集めでもあるらしいが、ほとんど趣味の世界という奴だろう。……先が思いやられるけれど、やっぱりいろいろなヒトが我が輩の故郷に注目してくれるのは嬉しい。忘れられた川、にはななって欲しくないからねえ。

と、ホトケ氏が言ったかどうかはさておいて。

谷保用水から府中用水を経てやっと多摩川とながっている矢川は、小さいながらも様々な顔を見せてくれる。水源の一つである湧水付近は東京都の緑地保全地域だし、下流部は私有地であるが故に未だうっそうとした雑木林の中。かと思うとコンクリート三面張りの親水広場もある。住宅街かと思えば屋敷林を背にした現役の洗い場もある。なんだかとても“けなげな川”なのだ。

とかく大学通りに象徴される整った街並が看板になりがちな国立にこんな川がある。動けない矢川に変わって宣伝よ!!……すっかりハマってしまった。でも都市計画ではこの川の上に20m級の道路が2本。これは余り考えたくない……。

<やっぱり私は川が好き!> どうやら幼い頃遊んだ多摩川の記憶は、今になって息を吹き返してしまっただけ……。——多摩川バンザイ!——

よみがえ

## 甦れ！多摩川

## ■ 大栗川水系大田川を歩く

(脚)とうきゅう環境浄化財団 山道省三  
客員研究員

京王帝都相模原線の南大沢駅周辺は、今や多摩ニュータウン開発の一環として宅地開発が進んでいる。都立大学の移転や住宅・都市整備公団、東京都などによる住宅が、ポストモダン型の建築デザインや色彩をとり入れ、多摩センター地区とは趣きを異にした街並を形成している。

大田川は多摩ニュータウンの川として大きく変貌した大栗川の右支川で、いわゆる南大沢と呼ばれた奥の深い谷戸に沿って流れる小川だった。その谷戸も宅地開発によって一部埋められ、谷底は鉄道敷となってしまった。

南大沢駅から東南方向の奥地には確かに大田川の源流の細い流れが見られるはずだった。しかし、線路沿いに陸橋の上から水面を探してもそれらしき水路は見当たらない。地形図上では国土地理院発行の「武蔵府中」と「八王子」(1/25000)のちょうど境目にあたり、細い流れは「八王子」版に記されていた。ところが、川どころか地形がすっかり変わり、完璧に宅地になってしまっている。そして、源流部で二つに分かれる流れは消えてしまっていたのである。

稜線やわずかな地形の名残りを頼りに歩いていくと、京王バス南大沢営業所と宮上小学校の間に尾根に続く道があって、登っていくと、原っぱに湧き水が流れをつくっている。そして、さらに奥の峠のあたりに差しかけた時、小さな溜池を林の中に発見した。雑木林に囲まれた溜池は薄い青緑色の不思議な色をしていて、古くからそこにあった様な神秘的な雰囲気が漂っている。峠道は舗装された道路だが、その道路に架かる水元橋を境に池のある方は未開発地区で、反対側は新しい

住宅地である。多摩ニュータウンベルコリーヌ南大沢とカンバンにあった。そしてどうやらその水元橋の下を通る水路なのか園路なのか分らない所が、かつての大田川源流のようであった。その園路を下っていくと左手の斜面は、八王子市が管理する南大沢緑地となっていて、わきみず広場といったポケットパークがある。そして、その斜面から豊かな水が湧出する壁泉があってそれを水源とする親水水路が園路沿いに流れ、住宅地の中を縫うように流れている。水はどうやら循環式となっていて本物の湧水ではない。これが大田川の替りなのか知らないが、いずれにしろ大田川の源流部の流れは全く消えてしまっていた。

さて、一級河川大田川はどこから始まるかと言えば、南大沢駅から400m程京王堀之内駅寄りに行った県道脇から突如始まる。その地点から上流は暗渠となっているからどこにつながっているか分らない。開渠部の最上端はコンクリートブロックの3面張りで単純な排水路に過ぎない。水路は1983年竣工となっていることから、下流の大栗川の工法がそのまま延長されてきたのだろう。

大栗川や乞田川は多摩ニュータウンの川として単純なコンクリート3面張水路に変貌し、悪い意味で都市河川のあり方を議論する事例となってきた。大田川の開渠部は大栗川に合流する地点までの約1.7kmが全く同様の構造となっているが、暫定工事であり河川敷地に余裕があることから将来的には新たな川づくりの余地が残されている。大田川の中流部に土砂が堆積しヨシやガマが生育しているわずかな区間があった。そこにはカルガモのつがい居ついていた。そして大栗川もかつて見た単調な水路から少しづつ自然の復元が見られる。大田川が次の改修整備の段階でどうなるのか分らないが、東京都も従来の排水路型とは異なる川づくりをめざそうとしている。大田川にふさわしい新たな川づくりを期待したい。



# 《 “多摩川およびその流域の環境浄化に 関する調査・試験研究” 募集 》

当財団は昭和50年から表記研究の公募を毎年行ってきました。既に307件の研究に対して助成金を交付し、239件の研究成果を得ることが出来ました。

平成7年度も引き続き首都圏における「多摩川およびその流域の環境浄化に関する基礎研究、応用研究、環境改善計画のための研究」を下記のとおり募集いたします。

## 記

### 1. 研究対象者

学識経験者の方はもちろん、一般の方でも研究に意欲のある方であれば、どなたでもご応募いただけます。

### 2. 研究対象テーマ

- (1) 産業活動または住生活と多摩川およびその流域との関係に関する調査および試験研究
- (2) 排水・廃棄物等による多摩川の汚染の防除に関する調査および試験研究
- (3) 多摩川およびその流域における水の利用に関する調査・試験研究
- (4) 多摩川をめぐる自然環境の保全、回復に関する調査・試験研究

#### ◆公募締切日 平成7年1月17日

応募についての詳細は下記事務局までご連絡下さい。

〒150東京都渋谷区渋谷1-16-14

(渋谷地下鉄ビル内)

電話 (03) 3400-9142 働とうきゅう環境浄化財団

### 年度別助成件数・助成金額

年 度	研究区分	助成件数			助成金額 (千円)
		新規	継続	計	
昭和50年度 昭和60年度	A類	119	118	237	372,713
	B類	59	41	100	41,011
	計	178	159	337	413,724
昭和61年度	A類	6	20	26	45,851
	B類	9	9	18	11,585
	計	15	29	44	57,436
昭和62年度	A類	9	15	24	42,704
	B類	6	12	18	9,932
	計	15	27	42	52,636
昭和63年度	A類	10	13	23	24,878
	B類	4	10	14	11,167
	計	14	23	37	36,045
平成元年度	A類	8	12	20	38,652
	B類	3	5	8	9,334
	計	11	17	28	47,986
平成2年度	A類	10	11	21	37,614
	B類	6	5	11	10,666
	計	16	16	32	48,280
平成3年度	A類	8	15	23	32,162
	B類	6	6	12	7,861
	計	14	21	35	40,023
平成4年度	A類	7	14	21	37,394
	B類	5	9	14	10,544
	計	12	23	35	47,938
平成5年度	A類	10	11	21	35,632
	B類	9	7	16	12,118
	計	19	18	37	47,750
平成6年度	A類	5	13	18	31,318
	B類	8	12	20	16,851
	計	13	25	38	48,169
合 計	A類	192	242	434	698,918
	B類	115	116	231	141,069
	計	307	358	665	839,987

※ A類は学術研究、B類は一般研究

## 第 8 回「多摩川実査」を終えて

11月11日、財団主催による第8回「多摩川現地実査」が行われた。今年のテーマは「多摩川流域の博物館」である。ここ20年ばかり多摩川流域の地方自治体が競って博物館、郷土資料館を開設した。その数は40館に近い。大きく分けて、自然科学系と、歴史民俗系のものがあり、それらがミックスされた郷土資料館が非常に多いのが特徴である。開発に伴い、出土物があり、昔からの民具の保存が必要となるようになり、それらの収蔵、調査、研究、展示を受け持つ博物館が必要になってきた背景がある。

今回は多摩川中流域にしほりこみ、「府中市博物館」、「日野市ふるさと博物館」、「立川市歴史民俗資料館」の三館を訪ねた。

参加者は当財団の助成研究者、住民、行政、選考委員の先生方など23名である。

マイクロバスで財団を出発する。車中で研究者の熱のこもった研究の紹介があった。

「府中市博物館」は、府中市郷土の森の中心施設であり、郷土の森自体が旧公共施設や民家、プラネタリウムなどが点在し、全体で博物館となっている。フィールドミュージアムというゆえんがうなずける。自然、考古、歴史、民俗の四分野からなる常設展示は内容豊富で飽きさせない。

「日野市ふるさと博物館」は府中の1/4ぐらいのわりあいこじんまりとした博物館である。多摩川と浅川に恵まれ、多くの用水、湧水のある都市の博物館としての特徴をテーマにわかりやすい常設展示を行っている。

「立川市歴史民俗資料館」も地域密着型のわりあい小型の博物館である。立川の自然環境、立川のあゆみ、立川の民俗といったテーマで常設展示

を行っている。この博物館の活動で面白いのは昔からの生活を実際に体験するコーナーを設け、たとえば「うどん」を作ったり、「機織り」を体験したりするところをみ始めていることである。

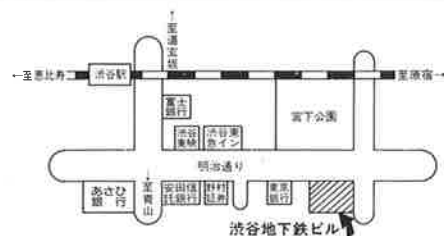
そういった体験を通じて郷土愛を育むことも大切なのではあるまいか。

研究者のなかに国立科学博物館の学芸員を長年経験され、大学で学芸員の養成講座をもたれている方がおられたので、最近の地域博物館の状況をお聞きしたところ、いわゆるハコはできたが、調査研究を含めた運営ソフトがこれからの課題であるとのことであった。大英博物館、パリの自然誌博物館、スミソニアン博物館などは展示スペースの裏にあたる研究、資料の収蔵室等が大きく、資料も膨大なストックを持っている。行政体が横並びの意識でオラガ町にも博物館ではすまない。学芸員が展示にばかり精力をとられ、調査研究ができないと内容が貧しくなるとのことであった。地域の環境問題についても、現在では常識的な知識では、生態系をくずさずに環境保全を行うことは難しくなっている。地域の環境保全についても博物館の研究調査機関としての役割は大事になってきている。地域住民の質問に対して、適切な指示を与え、自ら回答が無理な場合は大学等の専門機関を紹介するシステムづくりが求められる。また学芸員の博物館を横断するネットワークをつくることにより、博物館の内容のレベルアップを共同ではかることも大事であろう。成熟した社会には成熟した文化が求められる。

博物館の内容の充実を痛感する一日であった。

芳村重徳

- ・発行日 平成6年12月1日
- ・編集兼発行 (財)とうきゅう環境浄化財団  
〒150 渋谷区渋谷1-16-14  
(渋谷地下鉄ビル内)  
TEL (03)3400-9142  
FAX (03)3400-9141



\*印刷所 雄文社 〒336 浦和市常盤9-11-1 TEL(048)831-8125